『あの日見た青空は』

 　　　叶和泉

　　　登場人物

日向　晴夏（ひなた・はるか）（２１）　九年間、誘拐監禁されていた少女。

橘　悠（たちばな・はるか）（２６）　刑事。九年前、両親と妹を通り魔に殺されている。

　　　一幕

晴夏　九年という月日は、何もかも変わってしまうには、充分な時間でした。

　あの日……あの夏の日のことは青空しか憶えていません。今から九年前、当時小学六年 生だった私は、下校途中にある男に誘拐されました。後ろから羽交い絞めにされ、スタ ンガンを首筋に押し付けられたそうです。誘拐現場にスタンガンが落ちていたので、そ うであろうとの推測だけであり、その真相はもはや誰にもわかりません。

　私を誘拐した男は、警察が家にやってきたその瞬間、事前に準備してあった毒を飲み、 自殺しました。

　警察に保護されて、監禁されていた家を出た私は、あの日から九年の歳月が流れていた ことを知りました。

　私の時間はあの日から止まったままです。

　私の時間が止まる前、最後に見た景色は、雲ひとつない、澄み切った青空でした。

　　　警察の取調室。

　扉を開け、橘悠が入ってくる。

　橘の手にはコンビニの大きな袋が下げられている。

橘　どうぞ。

　橘の声で日向春夏も取り調べ室に入ってくる。

　取り調べ室の中央にはスチール机がひとつとパイプ椅子がふたつ。

　壁には小さな窓がひとつついている。

　部屋に入ったはいいが、立ち尽くしている晴夏。

晴夏　……。

橘　そちらに座って下さい。

　　　奥に橘、手前に晴夏が座る。

橘　改めまして、今回、日向さんの担当をします、橘悠と申します。よろしくお願いしま す。

晴夏　はるか？

橘　そう、私も日向さんと同じ「はるか」って名前なんです。私は「ゆう」って書いて「は るか」って読むんだけど。

晴夏　ゆう？

橘　悠久の「ゆう」です。

晴夏　ごめんなさい。漢字は小学校で習ったものまでしかわからない……。

橘　あっ、ごめんなさい。そんなつもりじゃ。

晴夏　いいです。

橘　……あの、本当に取り調べ室でいいんですか？　もっと……なんというか……リラッ クスして話ができる部屋も用意できるんですよ。ここは薄暗いし、なんていうか、素っ 気ないですし。そもそも取調室ってのは悪いことをした人が入る部屋なんです。日向さ んは何も悪いことをしていないのに……。

晴夏　落ち着くの。

橘　え？

晴夏　落ち着くの。ずっといた、あの部屋に似ているから。

橘　……。

晴夏　今、警察の人が用意してくれた所にいるけど、色んなものがありすぎて……私の頭 じゃついていけない。まるで、ウラシマタロウ……になったみたい。

橘　急がなくていいんです。ゆっくりと、時間をかけて、慣れていきましょう。

晴夏　うん。

橘　それでは、本題に入ります。日向さんを誘拐、監禁していた砂山が自殺してしまった ので、詳しい経緯を日向さんにお伺いするしかなくなってしまいました。話したくない こともあると思いますが、できるだけ話をしてください。でも、無理にとは言いません。

晴夏　……うん。

橘　日向さん、私、刑事ですけど、臨床心理士の資格も持ってるんです。警察学校に入る 前は大学で心理学を学んでいたから。だからと言っては何ですが、安心して話してくだ さい。

晴夏　りんしょう？

橘　私は、心のお医者さんの資格も持っているってことです。

晴夏　お医者さん？　私はどこも悪くないよ

橘　……そうですね。そういえば、お腹は空いていないですか？　いろいろ買ってきたん です。遠慮なく食べて下さい。

　　　机の上にコンビニのビニール袋に入っていたお菓子を全部出す。

　　　色とりどりのお菓子のパッケージを見つめているけれど、無表情な晴夏。

橘　どうぞ。遠慮なんかしないでくださいね。

晴夏　わからない。

橘　選ぶ必要なんてないんです。なんなら全部持って帰ってもらってもいいんですよ。

晴夏　好きなお菓子がなにだったか、おぼえてない。思い出せない。ずっと考えてるんだ けど。

橘　……いろいろ食べていけば、そのうち思い出すと思いますよ。

晴夏　じゃあ、これ。

　　　なぜか一個だけカップラーメンが混じっており、晴夏はそれを手に取る。

橘　あっ、それ、私が後で食べようと思って買ったやつなんです。よけておくの忘れてま した。

　　　手に取ったカップラーメンを黙って机に戻す。

橘　ごめんなさい、大丈夫。食べて大丈夫です。そういえば、お箸が入っていないですね。

　　　お菓子の山の中から割り箸を探す橘。

晴夏　箸は……まだ苦手。上手にできない。

橘　え？

晴夏　箸は特別な日のものだって、言われて、ほとんど使わせてもらえなかったから。

　　　橘は、割り箸を探す手を止めて、椅子に座る。

橘　食事はどうされていたんですか？

晴夏　紙のお皿で食べた。手で食べた。毎日同じものだった。

橘　……これ、私のおすすめなんです。どうですか？

　　　お菓子のひとつを手に取って、橘は言った。

晴夏　よくわからない。

橘　あっ、こっちもお勧めです。

　　　橘は別のお菓子も手に取る。

晴夏　美味しいというものがよくわからない。みんな同じ味のような気がする。

橘　……。

晴夏　景色だってそう。綺麗な青空だねって言われても、よくわからない。

　　　手に持ったふたつのお菓子を机の上に戻す。

晴夏　私、これからどうなるの？

橘　……どうって、どういう意味でしょうか？

晴夏　お母さんもいなくなって、どうやって生きていけばいいのかわからない。私はもう 大人の歳だから、児童……なんとかで暮らせないって。

橘　安心して、私たちが全力でサポートします。時間はかかると思いますけど、社会復帰できますよ。

　　　椅子から立ち上がり、晴夏を励ます橘。

晴夏　お母さん……もう会えないなんて……。

　　　ゆっくりと椅子に座りなおす橘。

橘　お母様のことは、本当に残念でした。日向さんの唯一のご家族だったのに。あと少し 早く日向さんを見つけることが出来ていたなら、死に目には会えたかもしれなかったの に。警察を代表して謝罪します。申し訳ございません。

晴夏　私、ひとりぼっちなの。

橘　お母様の代わりにはなれなせんが、私たちがいます。

　　　沈黙。

晴夏　お話しは？

橘　え？

晴夏　私に聞きたいことがあるんでしょ？

橘　あ、はい、そうです。

晴夏　聞かないの？

橘　……わかりました。お聞きします。これは……とても大切なことなんですが、日向さ んにとって、とても辛い記憶なのかもしれません……それでもお聞きします。

晴夏　なに？

橘　あの男に、どのくらいの頻度で変なことをされましたか？

晴夏　変なことって？

橘　……裸にされたり、下半身を触られたりとかです。

晴夏　…………最初はすごく痛かったけど、そのうち慣れました。

橘　……それは、その、いつぐらいから、されていたんですか？

晴夏　憶えてません。でも、毎日のようにあったんです。とても嫌な時間だった。でも、 我慢しないとご飯がもらえないから。

橘　……そうですか。話してくれてありがとうございます。

晴夏　あの部屋でずっと考えてた。これはきっと罰なんだって。

橘　……罰？

晴夏　なんで、私が、こんな目にあうのか。わからない。わからなかった。だから罰だと 思った。お母さんの言いつけを守らなかった。まっすぐ家に帰らず、コンビニに寄った ことの罰なんだって……。

橘　そんなことありません！

　　　机をたたき、立ち上がる橘。

橘　そんなことはありません！　そんなことを、思う必要はありません！　悪いのは犯人です。砂山です。日向さんが…………大きな声を出してしまって、すいません。

　　　落ち着きを取り戻し、椅子に座る橘。

　　　晴夏は無表情で橘をまっすぐに見ている。

橘　……今日は……今日の所はここまでにしましょう。

晴夏　……これで終わり？　もう終わり？

橘　また来てください。でも一カ月は開けましょうか。次は来月でお願いします。

　　　二幕

橘　九年という月日は、何もかも忘れてしまうには十分な時間なのでしょうか。

　あの事件が起きたのは私が高校二年生の秋でした。日向さんが誘拐された事件の少しあ とです。被害者は十五人。うち死亡したのが七人。その中に父と母、そして妹がいまし た。

　最初、何が起こったのかまったくわかりませんでした。日曜日、家族みんなで買い物に 出かけたショッピングモール。あの男とすれ違ったその瞬間、突然、父が倒れました。 次に母も倒れました。切り裂くような悲鳴が聞こえる中、妹に振り下ろされるナイフが スローモーションで見えました。

　私は何が起きたのかを理解できず、ただ見ているしかできませんでした。

　妹の胸に深々とナイフを突き立てたあと、私を殺すことなく、男はすぐ後ろを歩いてい た男を殺しました。

　父と母、そして妹の血が地面に広がっていくのを見つめながら、私はただ、立ち尽くす ことしかできませんでした。

　あの時の風景は、今でも私の瞼の裏に焼き付いたままです。

　　　警察の取調室。

　　　中央に置かれた机をはさんで、晴夏と橘が座っている。

　　　橘の前にはノートが広げられていて、何かを書きつけている。

橘　では、これで調書取りは終了になります。お疲れ様です。日向さん、ありがとうござ います。

晴夏　……はい。

橘　あれから一カ月ですが、生活にも慣れてきましたか？

晴夏　はい。まだ、うまくいかないことも多いですけど。

橘　そうですか。よかったです。少しずつ、少しずつ。焦る必要なんかないんです。

晴夏　みんなに言われます。

橘　それで、私からの提案なんですが、これからはカウンセリングとして会いたいと思っ ているんですが、どうですか、日向さん？

晴夏　カウンセリング？

橘　前に言ったと思いますけど、私、臨床心理士の資格を持っているので、カウンセラー もできるんです。できるだけ日向さんの力になりたいと思いまして。迷惑だったら断っ てくれて大丈夫です。

晴夏　私は……いいですよ。毎日、何もやることはありませんから。

橘　じゃあ、月に一度、会いましょう。ここじゃない場所がいいわよね。

晴夏　……ここがいいです。

橘　え？　でも。

晴夏　ここだと問題があるんですか？

橘　問題はないけれど……。ここは取調室なんです。こんな殺風景な場所でいいんですか？

晴夏　ここ、落ち着くんです。

橘　わかりました。ここでカウンセリングできるように手配します。

　　　橘は机の上に広げていたノートをしまう。

晴夏　橘さんは、どうして警察官をしてるんですか？

　　　ゆっくりと晴夏を見つめる橘。

橘　私ね、両親と妹を殺されているの。通り魔による無差別殺人で。

晴夏　そうなんですか。すいません。

橘　謝るようなことじゃないわ。事件から九年。犯人はすでに死刑になってこの世にいな いわ。

晴夏　九年……。

橘　そう。日向さんがさらわれて、二カ月後に起きた事件だった。

晴夏　私、知りませんでした。

橘　私たちみたいな不幸な人間を増やさないように、私は警察官になったの。

晴夏　私たちは……不幸なんですか？

　　　晴夏の言葉に凍り付く橘。

橘　ごめんなさい。そんなつもりで言ったわけじゃないの。

晴夏　やっぱり、不幸なんですよね。

橘　これは、言葉のあやで……。

晴夏　気にしないでください。わかっています。私もだんだんと、わかってきましたから

橘　……。

晴夏　変なことを聞いてすいません。

橘　いえ、そんな、気にしないで。

晴夏　じゃあ、もうひとつ聞いていいですか？

橘　……どうぞ。

晴夏　犯人が死んで、どう思いましたか？

橘　……。

晴夏　私はあいつが死ぬのをこの目で見てた。……何も感じなかった。泡を吹いて倒れる あいつを、私はただ黙って見下ろしてた。

橘　私は……私は、終わったと思った。

晴夏　終わった？

橘　家族を殺されて、最初は悲しみしかなかった。毎日泣き続ける日々。次に怒りがきた。 犯人への、あいつへの怒り。それはすぐに憎しみに変わった。ただ、「むしゃくしゃして いた。誰かを殺したかった」という身勝手な理由だけで、私の大切な家族を奪ったあい つを憎くて、憎くて、殺せるものなら、自分の手で殺してやりたかった。そして……。

晴夏　そして？

橘　死刑が確定し、異例の速さで執行された。あいつが死んだとき、私の憎むべき相手は この世から消え去り、いなくなった。

晴夏　だから、終わったの？　復讐が終わったってこと？

橘　復讐が終わったのかはわからないわ。ただ、憎むべき対象がいなくなったことによっ て、私の中で何かが終わった。死刑になったことで、確実に何かはわからないけど区切 りがついたことだけは確かなことだわ。

晴夏　憎しみは、悲しみは消えたの？

橘　……消えるわけがないわ。思い出さないようにしているだけよ

晴夏　自分で殺したのなら、憎しみは消えたと思う？

橘　……さあ、どうでしょう。でもたぶん、自分で殺したとしても消えることはなかった と思う。

晴夏　私たちは、ずっと憎しみを抱えて生きていくしかないの？

橘　……忘れることでしか、憎しみを消すことはできない。私はそう思っている。だから、 何かに一生懸命取り組み、思い出さないようにしているの。

晴夏　……そうですか。私も時が経てば、いろんなことを忘れられる？

橘　そう願ってるし、そのお手伝いをしていきたいと思ってるわ。

晴夏　……忘れなくてはいけないの？

橘　え？

晴夏　忘れないと、生きていけないの？　忘れなければ不幸のままなの？

橘　忘れるってことは傷が癒えることと同じなんです。私たちは無慈悲な犯人に不条理に 心を傷つけられた。

晴夏　忘れれば、傷は治るの？

橘　時間が経てば怪我は治る。それは心も一緒です。だから時間をかけて忘れるんです。

晴夏　……うん。

橘　さあ、もう時間です。行きましょう。

　　　橘は立ち上がり、扉へと向かう。

　　　晴夏は椅子から動こうとはしない。

晴夏　橘さんの傷は、もう癒えたの？

　　　ドアノブに手をかけた状態で、橘は立ち止まる。

　　　ゆっくと、晴夏のほうを振り返る。

橘　そうですね、癒えたと思います。傷は時が経てば、いつかは癒える。でも……。

晴夏　でも？

橘　傷跡はなかなか消えない。

　　　三幕

　　　取調室。

　　　部屋の中央には机が置かれており、その前にある椅子に晴夏がひとり座っている。

　　　やがて扉があき、橘が入ってくる。

橘　ごめんなさい。遅くなっちゃった。

晴夏　こんにちは。橘さん。

橘　待ちました？

晴夏　いえ、そんなことないです。

橘　ほんとごめんなさいね、自分から時間の指定をしておいて。現場から向かう道が事故 で渋滞していて。

晴夏　気にしないでください。私と違って、橘さんは忙しい身ですから、仕方ないことで す。

　　　息を整えてから、橘は椅子に座る。

橘　さっそく始めましょうか。とは言っても、堅苦しくならなくていいのよ。カウンセリ ングなんて、世間話するだけみたいなもんだから。

晴夏　はい。

橘　で、最近はどうなのかしら？　何か新しいことを始めたりした？

晴夏　ひとり暮らしを……。

橘　そうそう、そうだった。そう聞いていたわ。どうなの、ひとり暮らしは。ちゃんとで きてる？

晴夏　ちゃんとできているのかはわかりません。でも自分でご飯を作って、食べてます。 買い物にもだいぶ慣れてきました。

橘　そう聞いて安心したわ。

晴夏　スーパーでいろんな食べ物を買って、手あたり次第食べてみています。美味しいも の、美味しくないもの、たくさん食べました。でも、いまだに私が好きだったものが何 なのかは思い出せません。

橘　……大丈夫。そうやって続けていく内に、すこしずつ形になっていくものよ。

晴夏　そうですか。

橘　そういうものよ。他には何かある？　ちゃんと一人で眠れている？

晴夏　今まで誰かがそばにいたので、ひとりになるのは久しぶりで新鮮です。静かな部屋 にいるとあの時を思い出しそうになるので、テレビを一日中点けています。見てはいま せん。

橘　こういう言い方はよくないのかもしれないけど、九年という月日を失ったとしても、 日向さんはまだ二十一歳なのよ。どうにだって人生を取り戻すことができるはずだわ。 いえ、取り戻せると思うわ。

晴夏　……三日前、同窓会があったんです。

橘　へえ、同窓会。小学校の？

晴夏　はい。私のクラスで一緒だった子が、励まし会を開いてくれて。十人ぐらい集まっ たんです。

橘　そうなんですか。

晴夏　みんな大人になっていて、すごく違和感を覚えました。でも、話しているうちにみ んなはみんななのかな？　って思うようになりました。

橘　そう、よかったわね。

晴夏　頑張って、頑張ってってたくさん言われました。なんで頑張らないといけないのか なって思いました。

橘　それはね、日向ちゃん、お友達も気を使って言っているだけなの。

晴夏　橘さんは頑張って生きてきましたか？

橘　頑張らないで生きている人なんていないと思うわ。

晴夏　頑張るってなんですか？　私は何を頑張ればいいんですか？

橘　それは……。

晴夏　ある女の子が言いました。絶望しないでね。自殺なんかしないでねって。絶望して はいけないんですか？　自殺してはいけないんですか？

橘　……私はね、誤解しないでほしいんだけど……自殺してもいいと思っている。

晴夏　……そうですか。

橘　日向ちゃんに死んだ方がいいって言ってるわけじゃないのよ。そこは誤解しないでね。

晴夏　わかってます。

橘　絶望に負けることだってある。私も絶望のふちを見た人間だから、そのことがよくわ かる。……あの事件のあと、一週間ぐらい経ったときかしら、私、死のうと思ったの。

晴夏　でも、思いとどまったんですね。

橘　今、ここでこうやって日向ちゃんと話しているのが、その証拠よね。

晴夏　どうして……生きていこうと思ったんですか？　私には今、生きている理由がない んです。頑張る理由がないんです。

　　　橘はゆっくりと立ち上がり、窓のほうに行く。

　　　窓の外は雲っているのか、ぼんやりとした光がさしているだけだ。

橘　負けたくなかったの。犯人に。

晴夏　……どういうことですか？

橘　あの日、カミソリを手首に当てたその瞬間、あいつの顔が思い浮かんだの。

　　　橘は大きく息を吸い込み、晴夏を見る。

橘　身勝手な犯人のせいで、自分が死んでしまうなんて、負けだと思った。理不尽に歪め られた私の人生は、どうやったって元には戻らない。だけど、だからこそ、これ以上あ の男の好き勝手にはされたくないと思ったの。

晴夏　……私には難しい話です

橘　私が自殺するのは、間違いなくあいつのせい。あの男のせい。

晴夏　そうですね。

橘　あいつに人生を操らている。これ以上、そんなことはされたくない。だから死ぬのは 負けなの。

晴夏　負け……なんですか。

橘　そう。負けよ。

晴夏　でも生きるのが辛いなら、絶望しているなら死ぬのもありなんですよね。

橘　そうだと思う。そう思った瞬間もあった。でも私はそこから這い上がることができた の。

晴夏　橘さんは、強いんですね。

橘　どうしたって生きていかなければいけないのなら、せめて運命に抗って生きていこう と思っただけよ。

晴夏　……私には真似できそうにありません。

橘　真似なんかしなくていい。日向ちゃんには日向ちゃんの生き方がある。それをゆっく と探せばいいと思うわ。

　　　橘は再び椅子に座る。

橘　失くしたものは取り戻せない。前を向いて生きていくしかないのよ。

晴夏　何を失くしたのかすら……私にはまだわかりません。九年という時間だけが、私の 失くしたものです。

橘　ある瞬間、ふとした瞬間にあの日のことを思い出す。そんなことは日向ちゃんにはな いの？

晴夏　あります。毎日のようにありました。でも、だんだんと減っているように思います。

橘　そうなの。それはいいことだわ。

晴夏　この前、橘さんが言った、傷は時間とともに治るってことが、少しだけわかった気 がします。橘さんの傷跡もいつか癒えるといいですね。

橘　何年経っても傷跡が疼く。どんなに忘れようとしても、ふとしたきっかけで、ほんの 些細なことで思い出すの。

晴夏　……ずっと痛みに耐え続けるしかないんですか？

橘　もしかしたら、傷跡もいつかは消えるのかもしれないけど……私にはわからない。す くなくとも私の傷跡は消えることなく、疼きつづけている。

晴夏　死んでしまったほうが楽そうですね。

橘　何度だってそう思った。でも、そのたびに、あいつの顔が瞼の裏に浮かび上がってく る。あいつの薄ら寒い笑顔が。家族を殺したときに浮かべていた笑顔が！　私はあいつ に負けるわけにはいかないのよ。

橘　私の生きる理由。そうやって思うことで、今まで私は生きてこられた。……日向ちゃ んは私のようにならないで。そのためのカウンセリングなんだから。

　　　四幕

　　　取り調べ室。

　　　中央にある机をはさんで、晴夏と橘が座っている。

晴夏　アルバイトを始めました。

橘　え？　おめでとう。面接通ったのね

晴夏　履歴書の書き方や面接の受け方、教えてくれてありがとうございます。

橘　もう社会復帰したも同然ね。で、何の仕事に応募して採用されたの？

晴夏　コンビニです。

橘　コンビニなんだ。社会復帰第一歩としてはハードルの高い仕事のような気がするけど ……仕事はどう？

晴夏　レジとか品出しとか、サンドイッチが少なくなったら、裏に取りに行ったりとか。 覚えることがたくさんあって大変です。

橘　どう、楽しい？

晴夏　楽しいのかはわかりませんけど、仕事は何とかこなしています。。まだ始めて二週間 ですけど、働く喜びというものはなんとなくわかった気がします。

橘　大人になった証拠ね。お友達はできた？

晴夏　友達なのかはわかりませんけど、同じバイトの人とは良く話します。

橘　いいことよ。

晴夏　みんな、私が事件の被害者だってことは知りません。ちょっと変わってると言われ ますが、あとは普通に接してくれます。

橘　他には？

晴夏　あと、色んな人がいることを知りました。お客さんにも、従業員にも。

橘　コンビニは色んな人が来るもんね。

晴夏　色んな人と話をしました。若い人、年の人、男の人、女の人、みんな気軽に自分の こと話していくのは驚きました。店長は離婚していること。バイトの高橋さんは借金で 会社がつぶれかけていること。女子大生の如月さんは彼氏とラブラブなこと。最年長の 木村さんはいつもお孫さんの話ばかりです。

橘　楽しそうでなによりだわ。

晴夏　……はい。生きる理由なんてなくても生きていけることがわかりました。

　　　満足そうにうなずく橘。

橘　この調子だとカウンセリング終了の日も近そうね。

晴夏　そうですか……それはそれで寂しいです。

橘　あら、嬉しいこと言ってくれるのね。お世辞でも嬉しいわ。

晴夏　お世辞なんかではありません。

橘　わかってるわ。私だって日向とのカウンセリングがなくなるのは寂しいけど、カウン セリングはいつかなくなるものなのよ、本来は。

晴夏　傷が癒えるように……。

橘　……そうね、そうかもね。

晴夏　私、橘さんに少しお話しがあります。

橘　何？

晴夏　働き始めて、色んな人の話を聞きながら、私はあることを思いました。

橘　あることって？

晴夏　みんな一緒なんだってことです。

橘　……ちょっとよくわからないわ、日向。

晴夏　みんな同じなんです、私たちと。傷跡の大きさに違いがあるだけで、みんな傷跡を 抱えて生きている。店長だって離婚してから心に大きな穴が開いたって言ってました。

橘　……私の事件を離婚なんかと一緒にしないで。

晴夏　女子大生の如月さんは彼氏とラブラブだけど、家にはアル中のお父さんがいて最悪 だって。借金に苦しむ高橋さんはいつも眠そうな顔して会社が終わったあとに働きに来 ています。

橘　……みんないろんな人がいて、色んな事情がある。私だって、それくらいのことは知 っているわ。

晴夏　みんな許せないものや傷を抱えて生きているんです。

橘　そんなこと私だってわかってるわ。

晴夏　じゃあ、どうしてみんな笑って生きているんですか？

橘　私だって笑って生きているわよ。笑っていないのは日向のほうよ。

晴夏　そうですね。私はまだ上手に笑うことができません。

橘　ほら……。でも安心したわ。日向がそうやって色んな人に触れ合って、成長していく のを身近で感じることができて。

　　　橘は椅子から立ちあがって大げさに喜ぶ。

晴夏　橘さん……自分を許してあげて下さい。

橘　え？

晴夏　自分自身を許すことが、私には、私たちには必要なんです。

橘　何を言ってるの、日向。

晴夏　どうしたら傷跡が癒えるのか、わかったかもしれません。傷は時間が経てば癒えま す。でも傷跡は消えない。傷跡の疼きを消すには、自分自身を許すしかないんです。

橘　…………日向は、自分自身を許せるの？

晴夏　私にも、まだできません。でも、許していこうと、許せるようになろうと思って… …。

橘　私には無理。

晴夏　え？

橘　私にはできない。そんなことは、そんなことはできない。

　　　うろたえたように、橘は辺りを歩き回る。

晴夏　橘さん……。

橘　私にはあの男を許すことなんてできない。私を、自分を許すことができない。絶対に できない。忘れることだってできない。

晴夏　そうやって、ずっと事件に縛られて生きていくんですか？

橘　黙って。

晴夏　そんな生き方。橘さんが言っていた犯人の手のひらの上で踊っているのと一緒じゃ ないんですか？

橘　うるさい。

晴夏　そんなのは……。

橘　あんたとは違うのよ！

　　　橘は勢いよく机を手のひらで叩きつける。パイプ椅子も蹴り倒す。

橘　あんたは家族を殺されたわけじゃない！　時間と処女を奪われただけ！　私は失くし たの！　父を、母を、妹を！　二度と戻っては来ない！　あいつが、あの男が私から奪 い去っていったのよ！

晴夏　……橘さんの言う通りなのかもしれません。母は死んでしまったけど、それも病気 です。私は時間と処女以外、奪われてはいません。

　　　長い沈黙。

　　　振り乱した髪を整え、橘は倒れたパイプ椅子をもとに戻す。

橘　……ごめんなさい。

晴夏　私も言い過ぎました。ごめんなさい。

橘　もう、カウンセリングは終わりにしましょう。

晴夏　そうですか……そうですね。

橘　今日で最後にしましょう。これ以上、続ける必要はもうないわ。

晴夏　はい。わかりました。

　　　立ち上がる晴夏。

　　　まっすぐに橘を見つめる。

晴夏　忘れなくても、許せなくても、本当はいいと思っています。私はただ、橘さんも幸 せになってほしいと思っているだけなんです。

橘　……まるで私がカウンセリングを受けているみたいね。

晴夏　ごめんなさい。

橘　ありがとう。気持ちだけは有り難く受け取っておくわ。

晴夏　……。

橘　でも、私は変われない。変わることができない。変わってしまうことが怖いの。家族 の死を忘れてしまうことが怖いの。

晴夏　……忘れても、怒る人はいませんよ。

　　　時間が止まってしまったかのように、見つめあう二人。

　　　いつまでも動くことがない。

　　　五幕

　　　取調室。部屋の中には晴夏と橘がいる。

　　　晴夏は椅子に座っているが、橘は晴夏に背中を向けて、閉まっている窓を見ている。

晴夏　急なお願いを聞いてもらって、ありがとうございます。橘さんもお忙しいのに。会 っていただいて、ありがとうございます。

橘　忙しいなんてことはないわ。まあでも、残務処理がまだ少し残ってるけど。

晴夏　残務？

橘　私ね、刑事を、警察を今月いっぱいで退職するの。

晴夏　え？　どうして？

　　　晴夏に向き合い、椅子に座る橘。

橘　私、日向さんに「世界に絶望して自殺するのもアリだけど、それは犯人に人生を操ら れえているみたいだから気に入らない。だから私は生きるんだ」って言ったじゃない。

晴夏　……憶えています。すごく強い人だと思いました。

橘　強くなんかないわ。自分の弱さを、そうやって必死に隠していただけなのよ。結局の ところは。

晴夏　それが退職にどう繋がるんですか？

橘　犯人のせいで人生をゆがめられ、それに抗うために生きているのに、私はあの事件が きっかけで警察官に、刑事になった。それは結局、犯人にゆがめられた人生のレールに 乗っているってことなんじゃないかって……そう気づいた。気づかせてくれたのは、日 向、あなたよ。

晴夏　だからって、今更辞めなくてもいいんじゃないですか？

橘　もう決めたことだから。

晴夏　誰だって、ほんの些細なきっかけで、何かを目指したするんじゃないですか？　橘 さんが警察官になったことだって、必然だったように思いますけど。

橘　そうね。日向の言う通りだと思う。でも、私は……私は本当は刑事なんかやりたくな いし、そもそも向いているとも思えないのよ。そのことに気づいたってだけよ。

晴夏　……。

橘　もっと言うとね、刑事をやっていては、私は幸せにはなれないと思った。犯罪者を捕 まえることで、私は自分の罪を償おうとしていた。犯罪者を自分にみたてて、捕まえる ことで自分を罰していた。けど、そんなものでは私の罪は消えない。いえ、罪は何をや っても消えないの。犯人が死刑になっても、事件が消えてなくならないように……。

晴夏　橘さんは……私には「自分を責めないで」って言ったくせに、ずっと自分を責め続 けていたんですね。

橘　……そういうことに、なるのかな。私は日向みたいに、自分を許すことなんて……た ぶん死ぬまでできない。

晴夏　退職して、どうするんですか？　まさかニート生活ですか？

橘　心理カウンセラーを本格的に目指してみようと思ってるの。自分を許せないからこそ、 同じように苦しんでいる人に、何か道を示すことができるかもしれない。苦しみを知っ ている人間だからこそ、出来ることがあるんじゃないかと思って……夢物語なのかもし れないけど。

晴夏　私、先週バイト先の男の子から告白されたんです。

橘　は？　え？　そうなの？

晴夏　突然のことだったので、私もだいぶ戸惑いました。まさか、私が恋愛対象になって いるとは思っていなくて。

橘　返事は？

晴夏　まだ保留していますが、付き合ってみようと思ってます。

橘　……そう。いいと思うわ。

晴夏　少し前まで、私みたいな人間は、誰かから愛される資格なんてないと思ってました。 そもそも愛や恋愛が何かなんてわかっていませんでした。まあ、今でもわかりませんけ ど。

橘　恋愛に対しては、私も日向と似たようなレベルなのかもしれないわ。

晴夏　好きな食べ物もできました。麩饅頭が今の私のベストフードです。

橘　また、渋いチョイスね。

晴夏　いまだに自分が好きだった食べ物を思い出せません。でも、もういいんです。それ でいいと思えるようになりました。変わらないものなんてない。変わらない人なんてい ない。変わることはとても怖いけれど、変わりながら生きていくしかないんです。

橘　日向は……強いわ。

晴夏　強くなんてありませんよ。自分を保てないほど、弱くて弱くてちっぽけな人間です、 私なんて。でも、流されながら、たゆたいながら生きていくのも悪くないのかな。そう 思うようになったんです。

橘　止まっていた時間が、流れ始めたってことかしら？

晴夏　上手いこといいますね。

　　　笑いあう二人。

晴夏　だから橘さん、幸せになってください。幸せになれるように生きて下さい。それが 私の願いです。

橘　……ありがとう。できるかはわからないけど、頑張ってみるわ。そのために退職した んだしね。

晴夏　どうしても、そのことだけが伝えたかったんです。

　　　椅子から立ち上がる晴夏。小さな窓の方に歩いていく。

　　　晴夏は思いっきり窓を開け放つ。

　　　窓の外からやってきた夏の風が部屋の中を青々とした空気で満たす。

晴夏　では、そろそろ行きます。バイトの時間もありますので。

橘　告白の返事をしなくちゃいけないし、ね。

晴夏　そうですね。

橘　見送るわ。

　　　二人は取り調べ室を出る。

　　　外に出ると、むせかえるような夏の熱気が二人を迎える。

晴夏　今までありがとうございました、橘さん。

橘　お礼を言わなければいけないのは、私の方です。日向さん。

晴夏　最後ぐらい、名前で呼びあいませんか？

橘　……さようなら……晴夏。

晴夏　さようなら、悠。

　　　晴夏は橘に背中を向けて、一歩を踏み出す。

　　　晴夏を歓迎するかのように蝉しぐれが響きわたる。

　　　照り付ける日差しの中、晴夏はゆっくりと空を見上げる。

晴夏　……ああ、きれいな青空。

　　　空を見上げながら、少しだけ笑う。

　　　じっと空を見つめているが、やがて歩き出す。

　　　自らの足で、ゆっくりと。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　幕